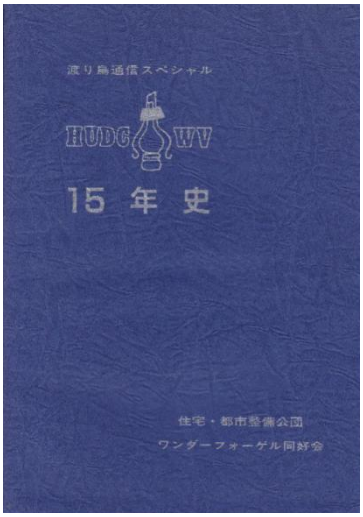
ふろタン工房卒業論文　　室井 隆良

１．「渡り鳥通信」スペシャル

「忠犬ハチ公とロク公」というタイトルで掲載した前回のふろタン技研レポートは 1932(昭和 7)年迄遡っての忠犬ハチ公像の古い話からスタートとし、山岳部かワンダーフォーゲル部かの楽しい議論が続いて日本住宅公団ワンダーフォーゲル同好会が 1973 年 3 月 16 日誕生したことを伝えていました。

ワンゲル最盛期の「渡り鳥通信」の飛翔記録を纏めて、1988 年 12 月 24 日に発信したのが「15 年史」、公団本体の名称も JHC(日本住宅公団)から HUDC(住宅・都市整備公団」)に変わるなど、大きな変化と永い年月を感じる本で、1983 年 8 月 4 日の多摩ニュータウンでのワンゲル 10 周年記念パーテイーの写真も掲載しています。



亡くなられた方も笑顔で写っておられて寂しい気持ちにもなりますが、ワンゲル全盛期の大切な写真と云えるでしょう。

ワンゲルの話ばかりしてきましたが実はこの写真ふろタン工房メンバーの顔が沢山写っているのです。

少しここから離れて、ふろタン工房のこれからのお付き合いメンバーについて考えてみましょう。最初のメンバーはふろタン工房設立のきっかけになった「まちナビ倶楽部」の小澤一美さん(O)と桂久誼さん(K)のお二人、M は室井です。

M 「まちナビ倶楽部」が NPO 法人設立に動き出した頃は、公団が UR 都市機構になり、技術サービスも都市整備プランニング等と合併して現在の UR リンケージになりましたが(2004年)、私はその時4社統合の事務方みたいな仕事をやらされていて、倶楽部のメンバーに参加する余裕がありませんでした。でも2005年6月に NPO 法人「まちナビ倶楽部」になり2006年から駅力調査にニュータウン調査と居心地調査が加わり、「居心地観察会」が始まってから私も賛助会員になって時々観察会に参加させてもらうようになりました。

K 駅力調査の流れを引き継いだのが居心地調査と云えますかね。

M 時が下って2013年3月に UR ワンゲル同好会の海外遠征登山でミャンマーのビクトリア山に登り、帰国後「山と共に生きる地域づくり」の取り組みを始めたいと思い、「まちナビ倶楽部」にミャンマー部会 をつくってもらいたいとお願いしました。最初に相談したのが昨年亡くなられた三宮満雄さん「いいよ！いいよ！」と云われたのでその気になって定例会に説明に行ったら…

O 活動の違いなどの定款の変更手続きなどあって「そう簡単にはいかないよ！」という意見でしたね。

M ハナシが違うじゃん！(笑) 困っていたら、島さんが応援するから新しいNPOを立ち上げた方がイイよと助け舟を出してくれて…そういうことになってしまいました。それで名前も「まちナビ倶楽部」と同じようにひらがな＋カタカナ＋漢字にした「ふろんてぃあタウン工房」の設立発起人総会をワンゲル仲間で開催しました。不慣れな手続きに手間取って再申請になったりして、第2次ビクトリア山調査登山(2014年3月14～20日)には間に合わなくて、設立準備室のままでの行事になりました。そんな経緯があったことで気を使っていただいたのか、「まちナビ倶楽部」 から三宮さんと森角さんが第2次隊のメンバーになってくれて、今でも感謝しています。

「ニュータウン造りなどに携わり、第2の人生を歩んでいる中高年の人たちが、生活の足元を見直して質を上げようという思いからボランティアで取り組んだ。集まった約30人のメンバーは五～六〇代の公団OBが主流」と書いて記事を載せたのは2004年1月15日付の日本経済新聞、写真には今も「まちナビ倶楽部」で活躍している金子さん・早川さん・田中さんが写っています。

「まちナビ倶楽部」からは、その後も頻繁に連絡が届きます。4月19日には「メルマガ210号」送付の連絡があり、早川さんが理事長を退任し副理事長が早川・田中の二人体制になり新理事長が、郷緒さんになったことが伝えられました。

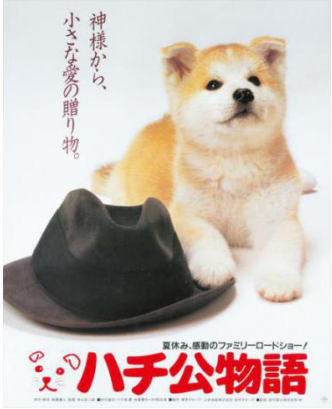
「まちナビ倶楽部」、総会等必要な手続きはどんな時でもキチンと行う、「ふろタン工房」ではナカナカまねの出来ない理想の先輩格法人ですが、高齢化は「ふろタン」以上に進んでいます。どうするのかな…URワンゲル同好会との連携など、もしかすると良い手なのかも…。そんなことを考える毎日です。

2．ふろタンホームページ点検作業

この技研レポートのタイトルは「ふろタン工房卒業論文」にしてありますので、ホームページの各コーナーの点検作業から始めましょう。

最初はふろタン通信バックナンバーコーナーです。2013年4月15日の渡り鳥通信№.910をVol.0としてVol.1は2014年2月28日付でミャンマービクトリア山の現地調査を伝える内容、ふろタン工房はNPO法人認定手続き中の発信、NPOの肩書がつくのは2014年6月です。

次がふろタン技研コーナー、研究レポートの発表コーナーで2018年4月の「二都物語研究会30回記録誌」を掲載、2018年10月31日付では、Vol.1「いちばん近い国ー中国」を研究レポートのベストサンプルとして載せています。



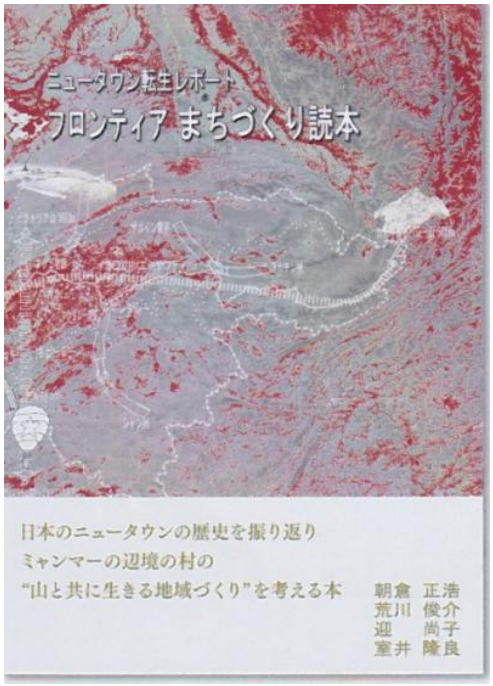
そして次が、今回の「渡り鳥通信」スペシャルで紹介したまちナビ倶楽部の活動、インタビューコナーの2018年12月Vol.10になるのですが、何度も書いたように、インタビューは次の2020年1月のVol.11で止まったままになっているのです。

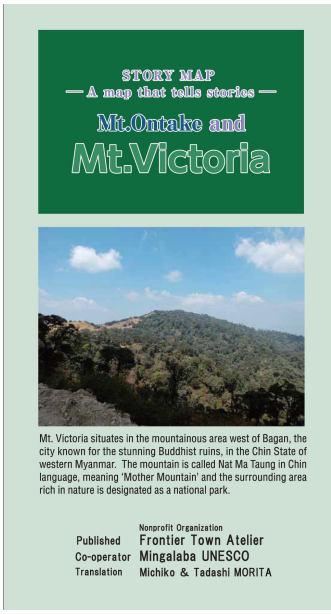
どっしりと構えているのがふろタン年表コーナー、1973年3月16日の年表NO.1日本住宅公団ワンダーフォーゲル同好会誕生から始まって、年表NO.2は2014年3月ビクトリア山第2次調査～、年表NO.3が2016年11月第6回ふろタンインタビュー～、年表NO.4が2021年1月核兵器禁止条約発効～で始まって、2023年5月の小説「その日から…」発行で終わります。

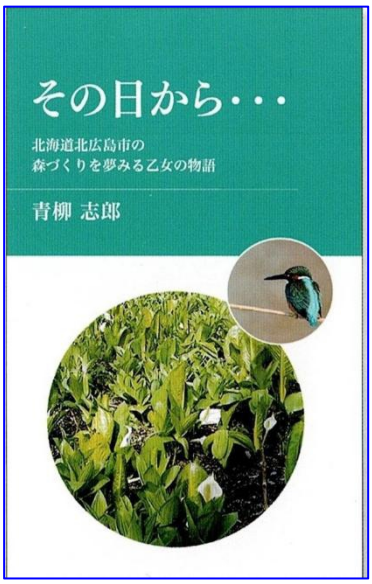
そして締めになっているのが出版コーナー、今までの出版物が、小説「その日から…」・「ふろタン年表 2021」・「ニュータウン転生レポートフロンティアまちづくり読本」・「ストーリーマップ―語りかける地図―御嶽山とビクトリア山」と、地図を含めて 4 冊の本が並んで載っています。

3．ふろタン工房の出版事業

ホームページに掲載されている出版物を出版順に並べ直してみましょう。
スタートが「まちづくり読本」です。2014 年 2 月、朝倉・荒川・室井・迎 4 名で書いた NPO 法人ふろんてぃあタウン工房設立のきっかけになった本です。次の「ストーリーマップ」は 2015 年 11 月のビクトリア山第三次調査を終えて作成した地図、そして「ふろタン年表」は前史の日本住宅公団ワンダーフォーゲル同好会の活動から始まって、ふろんてぃあタウン工房に繋がるあゆみを載せ、ふろタンメンバーの青柳志朗さんが亡くなる前に書かれた 2021 年 5 月発行の「その日から…」で締めています。





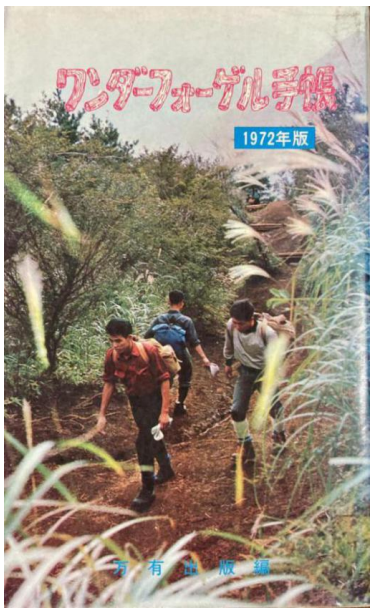


今までの色んな思い出話を辿りながら書き始めた「ふろタン工房卒業論文、今回色々とお話し頂いた「まちナビ倶楽部」と同じように、永いお付き合いがあるのが「ミンガラバーユネスコクラブ」です。2014 年 12 月に高円寺のミャンマーコーヒーの店「ぽれやぁれ」に伺って「ユネスコクラブ」設立準備中だった安彦隆さんと小野寺有菜さんに登場頂いたのが第 1 回ふろタンインタビューです。左の写真はその時のお二人です。

その後もユネスコクラブの安彦さん・小泉さんからは「ぽれやぁれ」でのイベントだけでなく、多くの会場での催し案内等を届けて頂いています。

右の写真は 2023 年 11 月 3 日の文化の日の「ぽれやぁれ」でのイベント、「日本 de ミャンマー（文化・食と糸繰り人形劇）」です。タイトルを考えたのは今までも多くの技研レポートを投稿しているふろタンメンバーの宇塚幸生さんです。操り人形劇の写真は 2024 年 2 月のふろタン通信 NO.51 に載せています。

4．これからの「ふろタン工房」



「ふろタン工房卒業論文」というタイトルで書いた技研レポートですので、「ふろタン工房」のこれからについて書いて締めなきゃいけないなと思っています。

これからの「ふろタン工房」をどうするか久し振りの総会を開催してみんなで話し合いたいと思います。

このレポートに書いた「まちナビ倶楽部」や「ミンガラバーユネスコクラブ」との交流は、これからも続きます。

永い歴史を感じる UR 都市機構ワンゲル同好会との情報交換をこれからも続けながら、「NPO 法人ふろんてぃあタウン工房」の明るい未来を歩んで行きましょう！